



THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

トヨタ財団レポート

No.102
Apr.2005

30周年記念特集号

ISSN 0389-1984

contents

二つの「目から鱗」 木村尚三郎	1
トヨタ財団設立30周年を祝して 太田達男	3
わが「黄金時代」の13年間 林雄二郎	4
「いままで通りでよい」 山口日出夫	4
トヨタ財団への期待 石井米雄	5
トヨタ財団東南アジア・プログラム事務局を 東南アジアの片田舎に開設する案 石澤良昭	6
地球市民社会論の構築に向けて 「財団」に期待する 内海愛子	7

激動の時代にチャルカを回す 藤田和芳	7
坂本竜馬を育てる 高谷好一	8
トヨタ財団の思い出 池端雪浦	8
企業の論理を超え、社会の必要を見て 柏木 実	9
トヨタ財団と出会って 坂井正子	10
平成16年度助成金贈呈式 30周年記念パネル・ディスカッション	10
歴史に学ぶ 菅江宣雄	11

〔財団法人トヨタ財団〕

〒163-0437

東京都新宿区西新宿2-1-1

新宿三井ビル37階

TEL(03)3344-1701

FAX(03)3342-6911

http://www.toyotafound.or.jp/

二つの「目から鱗」

木村尚三郎 トヨタ財団理事長



トヨタ財団30周年に当たって財団のそもそもの原点である「幸せづくり」に奉仕する必要性を、あらためて痛感する。全世界の人がいまこれからの幸せ、「くらしといのち」の知恵と楽しさを求めて、外国への旅に出掛けている。

その数は、地球総人口の1割以上に当たる、7億弱に及んでいる。「自然の叢智」をメインタイトルとする、来年(2005年)の「愛・地球博」(2005年日本国際博覧会、愛知万博)が、「地球大交流」をサブタイトルとして掲げている理由がここにある。私たちのこれからの幸せも、諸外国ことにブリックス(Brics)の台頭によるアジアの国との交流、コミュニケーション、友だちづくりを抜きにしては考えることが出来ない。

政府も昨年(2003年)来、「観光立国」を明確に打ち出し、2010年までに外国人観光客を1千万人に倍増することを計画している。土地ごとに異なる生活文化にもとづいた、交流ないし観光立国の実現こそ、これからの私たちの幸せと繁栄にとって、不可欠の課題となるだろう。

アジア諸国を主な対象とするコミュニケーションを、今後具体的にどのような形で実現していくか。生活文化に根差し、足が地についた、抽象的でなく具体的なコミュニケーション、友だちづくり研究が、転換期の現代において強く求められる。

この点で最近、まさに「目から鱗」の落ちる貴重な経験を二度も味わった。一つは、出版されたばかりの青柳健二氏の写真集『アジアの棚田 日本の棚田』(平凡社、2004年7月、3200円)によってである。本書には中国の雲南省・貴州省・広西チワン

族自治区、韓国、ベトナム、ラオス、インドネシア、フィリピン、そして日本の棚田と生活文化についての、迫力ある美しい写真の数々とエッセイが収められている。

重いカメラ機材とともに僻地から僻地を廻り歩く著者の体力と知力、精神力は驚くばかりである。その著者が雲南省元陽県のハニ族村を訪れたときのことである。ここでは、「長街宴」と呼ばれる祭りがあり、御馳走を所狭しと並べたテーブルを、なんと200メートルにわたってつなげ、テーブルの両側から村民たちが会食をする。撮影のためにそのテーブルとテーブルの間から青柳氏が反対側に出ようとしたところ、古老が物凄い剣幕で「ダメッ」と制止した。

テーブルの列を絶対に横切ってはならない、村人の結び合いを断つことなのだから、というのがその理由であった。ああなるほど私も納得し、はじめて200メートルの意味を理解した。フランス革命200年祭でも、パリを中心としてフランスを縦断する形でテーブルが直線につなげられ、パン・チーズ・ワインを並べて会食するイベントが行われた。その意味も、まさに「連帯」であったに違いない。

日本ないしヨーロッパではふつう手をつなぎ、「輪になって踊る」ことが「連帯」を表わす。この場合も確かに、よそ者が輪を切ることは許されない。マチスの大作「ダンス」(1910年)では、5人の裸の女たちが輪になって草の上で踊っているが、その輪の一角は、手と手が離れ、切れてしまっている。そこには結ぼうとして結び合えぬ、現代人の孤独と不安がみごとな形

で描き出されている。

「目から鱗」のもう一人は、中国通の若い友人、麻生晴一郎君である。じつは大学の教え子であるが、中国底辺の庶民の暮らしを、一労働者として経験したという特異な経歴の持ち主である。

留学生として日本にやってきた中国人が、「友だちができない」と嘆き、結果として反日的になっていく、という話をよく聞かされる。それは、周りの日本人がよそよそしい、冷たいからだばかり思っていた。しかし、それがそうでないことを知ったのは、彼が2004年5月に出版した二冊目の著書『ころ熱く武骨でうざったい中国 書くことを禁じられた長旅』(情報センター出版局、2004年、1575円)によってである。

たとえ十年来親しく付き合い、コンパやイベントなどで一緒に談笑したりしても、それだけでは中国人にとって、「知り合い以上友だち未満の関係」でしかない。日本人と友だちになっ

たという実感を、彼らは抱かない。友だち(朋友^{ボンヨウ})とは、たとえ今日知り合ったばかりでも、自分の家に招んでくれて、御馳走してくれる人のことだ。日本人はよく、「自分の家は狭いから、汚いから招べない」というが、それは理由にならない。たとえいかに家が狭く汚くとも「招んでくれる」ということが大切である。

なるほど、私の乏しいフランスの経験からしても、その通りだと思う。家に招ぶのは、「これからは、お前と家族同様の付き合いをしよう」というメッセージである。家に招ばないのは、「その気持ちがない」という意思の表明、と中国人は受け取るのであろう。いや中国人ばかりではなく世界の常識で、日本人だけが変わっているのかも知れない。

このような「目から鱗」の発言が、足で稼ぐ形で若い人たちのあいだから出てきているのは、まことに心強い。トヨタ財団としても。



1984年の10周年記念シンポジウムに参加した、左から豊田英二理事長、林雄二郎専務理事、米国の財団評論家ワルデマー・A.ニールセン氏。ニールセン氏が手にしているのは、彼の著書の日本語訳『アメリカの大型財団』で、トヨタ財団が10周年記念事業のひとつとして翻訳出版した。



20周年記念事業「チャンパ王国の遺跡と文化展」(1995年東京1月、大阪2月)で挨拶する飯島宗一理事長

トヨタ財団設立30周年を祝して

太田達男 財団法人 公益法人協会 理事長



トヨタ財団設立前後の時期は私がフィランソロピーに邂逅した時期と完全に一致しているためか、色々な思い出が浮かんできます。

ある雑誌に私が寄稿した「公益信託にスポットライトを」という小論がきっかけとなり、総理府、信託協会そして発足直後の公益法人協会は公益信託実用化に向けて研究プロジェクトを共同で立ち上げました。そのようなわけで、私はチャリティやフィランソロピー調査のため、昭和48(1973)年から49(1974)年にかけて、英米にも赴き、著名財団やアンブレラ団体を訪問しました。そこで、法制・税制の仕組みはもとより、第3セクター、アルツレーイズム(利他主義)、啓発された自己利益、コーポレート・シティズンシップ(企業市民)などまったく知らなかった概念や用語を知りました。

そして、公益法人協会を根城にして、多くのフィランソロピーマンや研究者の方々の知遇を得ることが出来ました。

ちょうどその頃、トヨタ財団が設立されたのですが、私は林雄二郎氏や相田岩夫氏の警咳に何度も接する機会がありました。フィランソロピー駆け出しの私の青臭い議論を辛抱強く聞いていただきました。岩本さん、山岡さん、若山さんなど梁山泊に集まった新進気鋭の俊秀の方々ともすぐ仲良くなりました。30年前の貴重な、そして忘れ得ぬ思い出です。

トヨタ財団の出現はわが国の民間公益活動に一線を画す出来事でした。多目的財団であること、高名な研究者をいわばCEOとして迎えたこと、プログラム・オフィサー制度を導入し助成プログラムを能動的に開発する手法を取り入れたこと、そして当時としては超大型財団であること、そのすべてが米国では普通のことではあっても、一挙にこれを実現された初代理事長豊田英二氏のご慧眼には敬服するばかりです。

私は44年間信託銀行に勤務しましたが、本来の信託とは何かということを論ずるとき、必ず引き合いに出されたのは豊田佐吉翁が大正15(1926)年1月に設定された発明奨励信託です。「36時間連続して100馬力を出すことができ、その重量は60貫以内、容量は10立方尺以内で工業的に実施できる状態」で完成した者に100万円与えるというものです。まさに、公益信託の原型です。

公益追求の先覚者として果たされた佐吉翁の流れを汲むトヨタ財団の役割は、今後とも一層重要になるものと思います。

いま、明治29(1896)年公布の公益法人制度の抜本的改革が急進展しています。公益法人協会では、民間の、民間による、民間のための、公益法人制度作りを目指して活動しています。

トヨタ財団におかれては民間公益法人の主導的存在として、この面でも引き続きご指導、ご支援をお願いいたします。



第30回研究報告会「身近な環境をみつめよう」研究コンクールの10年とこれから、1991年11月
日高敬隆・前選考委員長(左)、小原秀雄・選考委員長(真中)

わが“黄金時代”の13年間

林 雄二郎 トヨタ財団評議員

▶トヨタ財団の初代専務理事(在職1974-87年)



今日はお詫びを申し上げようと思って参上致しました。何の前触れもなしにこう切り出した私を前にして、いかにも不可解という表情の豊田英二理事長であった。

「今まで理事会等で何かというフォード財団の前例を紹介して参りましたが、フォード財団はファミリー財団であって、企業財団であるトヨタ財団とは全く異なりますので、これを範とするのは間違いだからです……」

と、私の話は続いた。最後まで黙って聞いておられた理事長は「私ははじめから知っていましたよ。そんなことは何も御心配なく、これからすべて先生の思うようになさって下さい。何も御心配には及びません」

と言葉を続けられる理事長はいつもの温顔に戻っていて、いささかの曇りもなかった。

ずいぶん色々なことをやってきたが、いまふり返ってみると、いつも人に恵まれていたという思いが深い。まことに幸せだったと思うのだが、その中でも、トヨタ財団時代の13年間は格段であった。豊田英二理事長との出会いである。前述のフォード財団のことはいうに及ばず、フィランソロピーの実態や理念すべてにわたって実は私などより、はるかに深く且つ広い認識と理念をしっかりと持っていないながら、そうしたことは露ほども表には見せず、一切を私にまかせるといふことは、とても真似のできることはない。私にとっては文字通り“黄金”の13年間であった。

「いままで通りでよい」

山口日出夫 トヨタ財団監事

▶トヨタ財団で事務局長(在職1981-92年)
および常務理事(在職1990-94年)



豊田英二理事長から、「財団はいままで通りでよいのだから」と、言われて会社からトヨタ財団に転じて来た(1981年)。いままで通りというのは、「財団の自主性を尊重し、企業の枠をこえ、社会のニーズにいきいきと反応し、のびのびとした財団活動」ということであった。

しかし、私が転勤にあたって社内に挨拶した際に、「いままで通り」を期待しない幹部もいた。後年「山口は会社の役に立つようなことをやっていないという奴がいる」と、理事長が慨嘆したことがある。林専務理事が退任したあとは、周囲にも「いまのようなことをやってよいと、会社では思っているのですか」と私に念をおす人も現れた。それも世間的に言えば「企業財団の常識」であった。

そうしたなかでも、私は「いままで通り」を守りつづけようとした。単なる守旧ではなく、いつまでも創設時の心の若さを保ちつづけようとした心がけた。

30年も経つと、財団は妙に老成した姿に映る。豊田英二理事長が確信を持った自主性のある財団の素晴らしさや、アメリカの財団専門家をして「アメリカの財団がトヨタ財団から学ぶべきこと」と言わせたような鮮烈な印象は消えうせてしまったのだろうか。

「温故知新」という言葉もある。30周年はよい機会である。原点に立ち返って、再び「いままで通りでよいのだから」と言ってもらえるようにしてほしい。

トヨタ財団への期待

石井米雄 人間文化研究機構機構長

▶トヨタ財団の国際助成プログラムや「隣人をよく知る」翻訳出版促進助成プログラムの選考委員長を歴任、理事(在任1992-年)を務める。



「理想主義的現実主義」という考え方がある。一見矛盾した概念に見えるが、わたしはこれを処世訓にしている。理想を忘れるな、というのは簡単、しかも格好がいい。しかし理想を口にするだけでは、その理想を、現実の社会のなかで実現することはできない。その実現のプロセスには、実は、理想主義者の嫌う徹底したリアリズムを必要とするのである。リアリストに浴びせられるさまざまな中傷や非難の壁を乗り越えて、どうすれば初心を貫徹できるか。理想を追求する人間の、そして組織の、真の力量がここで試されることになる。

30年前、トヨタ財団は高邁な理想をかかげて発足した。フィランソロピーの伝統の乏しいわが国において、トヨタ財団は、真の意味でのフィランソロピーの実現にむけて努力を傾けてきた。その努力は、これまでの財団の事業に対して表明されてきた、国内、国外の助成対象者から寄せられている高い評価によって十二分に報われているとわたしは信じている。問

題はその次である。

そもそも組織とは、当事者の誠意や善意とは裏腹に、たえず硬直化の危険をはらんでいる存在である以上、理想の実現という見地から、絶え間ない見直しが要請される。善意で犯す誤りは、非難の仕様がなだけに、危険はむしろ大きい。財団のかかげる理想と、パフォーマンスとの間に乖離はないか。こうした検証は絶え間なく行われる必要がある。

30周年を迎えようとしている財団が、最近、プログラムの全面的見直しを行った。賢明な、そして勇気ある行為というべきであろう。30年は一世代を画す長さにあたる。歴史は、硬直した組織を活性化させるためには「新しい生命」をもたらす「運動」が必要であると教えている。30年を契機としてトヨタ財団に新しい「運動」が巻き起こり、つぎの30年に創造の火花をもたらすことを心から期待したい。



1990年11月にタイのバンコクで開かれた国際助成報告会
石井米雄・トヨタ財団理事(左端)

トヨタ財団東南アジア・プログラム事務局を 東南アジアの片田舎に開設する案

石澤良昭 上智大学学長

▶トヨタ財団の国際助成プログラムの選考委員長(在任1992-2001年)、評議員(在任2002- 年)



財団の構想諮問委員会の最終答申を拝見しない前にこんな提案を掲げると顰蹙を買うかもしれない。戦略夢物語として聞いてもらいたい。

事例として上智大学アジア人材養成研究センター(以下センター)は、本部を2002年10月からカンボジア・シェムリアップ市に置いており、研究者・嘱託職員が常駐している。センターには教育・調査研究・国際交流・広報の4部門が置かれ、アジア現地から世界へ向けて様々な情報を発信している。同時に情報の受信・蓄積の機能を持ち、ネットワークで全世界と結ばれている。思わぬ情報が飛び込んできたり、東南アジア世界に仲間入りをしたという実感が湧いてくる。

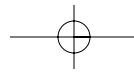
これまでのアジア研究は本拠を日本に置き往復することで成果を挙げてきた。現地に根を下ろした研究拠点を持たないままのアジア研究であった。言うなれば天文台を持たない天文学研究のようなものであった。

このセンターはアジア地域における持続的な調査研究などを実施し、いわば定点観測所であり、国際交流の場である。本当のところカンボジアにおいて眼前に繰り広げられるグローバル化の波動を把握し、カンボジア人にとっての痛みと矛盾点、グローバル化の功罪などを継続的に調査し、その結果を発信し、問いかけている。カンボジアから見ていると、グローバル化の恩恵というのは限られた富裕社会にだけもたらされ、地球上の大半の人々には無縁であるかもしれないと思えてくる。

東南アジアに住むと、その風・太陽・気温を五感で感じることになり、風土風物を体感できる。そうすると目には見えないうが東南アジア的発想に何か納得できる背景があると思えてくる。これこそ地に足をつけた東南アジア・プログラムになるのではないだろうか。

第4回研究コンクールでは行徳野鳥観察舎友の会「よみがえれ新浜 水質浄化と水鳥の誘致」が最優秀賞を受賞。写真は空気攪拌用の水車で、汚れた川の溶存酸素量を増大させる。1987年





地球市民社会論の構築に向けて 「財団」に期待する

内海愛子 恵泉女学園大学教授

▶ 研究助成プログラム(個人研究部門)の
選考委員長(在任2002-04年)、
地域社会プログラムの選考委員(在任2004- 年)



「華氏911」,マイケル・ムーアの作品は,荒削りだがアメリカがなぜイラクを侵略するのか,わかりやすく示している。2001年9月11日の事件は,「反テロ戦争」という名で,一時はグローバルな市民社会の広がりを押さえこんだ。しかし,この市民社会の流れは不可逆のようにわたしは感じている。インドネシアでもタイでも韓国でも,NGOがグローバル社会を目指す最先端の活躍をしている。有名な韓国の「落選運動」,既成メディアにかわる「オーマイニュース」というインターネット・メディアの立ち上げ,平和博物館運動の構想にも驚いた。韓国軍のベトナム戦争での残虐行為を取り上げるのはもちろんだが,博物館を固定した建物ではなく,人が集まるところにどこでも博物館の空間を作り上げていく,動く平和博物館である。熱っぽく語る研究者とNGO,韓国の運動の行動力と発

想の豊かさ,ユニークさに圧倒される。インドネシアでもタイでもNGOが,未来の夢を熱く語り行動している。

民主化,人権,地域の発展を,血みどろになって闘いつつきたアジアの研究者,NGOの活動家たちは,いま,市民社会をどうつって行くのかを模索し,ダイナミックに動いている。その視線は,日本はもちろん欧米のNGOの構想を越えた市民社会を構想している。アジアを歩いているとそんな思いを抱く。

私たちはアジアの人びとと共に,地球市民社会論とその構築に向けたダイナミックな研究と活動を作り出すことができるのだろうか。

「トヨタ財団」が,現状を打ち破るエネルギーに満ちた研究,活動を支え,共に歩む財団であり続けることを期待している。

激動の時代にチャルカを回す

藤田和芳 大地を守る会会長

▶ 市民活動助成プログラムの選考委員,
選考委員長(在任2002-04年),
地域社会プログラムの選考委員(在任2004- 年)

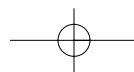


世界は,21世紀になっても平和を達成出来ず,戦争と血なまぐさいテロが続いている。人口問題や環境,食料の問題も人類は解決の糸口すら見出していない。国内の政治も経済も大混乱の時代である。毎日の新聞やテレビを目にする度に,自分はどう行動したらいいのだろう,何が出来るだろうと自問することが多い。

明治学院大学教授の辻信一さんが,こんな話をしていた。あるとき,マハトマ・ガンディーに一人の若者から投書がきた。「ガンディーさん,いま世界は大きく動いている。それなのに,あなたのような大物がなぜいつも,政治や経済の話ではなく,バランスのとれた食事をとりなさいなどと,どうでもいい話ばかりするのですか」と。

ガンディーは答えた。「あなたの言う大変革が起きるまで,自分の家の周りを掃除してはいけないなどということがあるでしょうか。小さな変革も出来ない者に,大きな改革など出来るわけはありませんよ」と。ガンディーは,自らチャルカ糸車を回して糸を紡ぎ,それを人々にもすすめた。祖母の時代から,そしてそのずっと前の時代からガンディー家はそうやって生きてきたのだ。そう,毎日の生活こそが大事なのだ。どのように生きるか,その生き方こそが世界を変える力になると,ガンディーは教えたのだという。

トヨタ財団は,今年で設立30周年を迎えた。今後も,ガンディーの教えのように,社会の原点に光を当てた活動をしていって欲しいものである。



坂本竜馬を育てる

高谷好一 聖泉大学教授

「伝統的サゴ生産集落における経済向上の試み」(1983, 85年度), 「南方系農漁複合の復原を活用した地元への誇りと人びとのつながりを呼び起こそうとする活動 滋賀県守山市下之郷遺跡を中心にして」(2003年度)で研究助成を受ける。



中・高校生に機会を与えて、現代の坂本竜馬を育てたい、と頑張っているのが愛媛大学の遅沢克也君です。この人は大学院生の時、トヨタ財団の助成をえて、スラウェシ島の湿地林に入りました。「伝統的サゴ生産集落における経済向上の試み」(1983年度)がテーマでした。以来、長年にわたって、このサゴ常食者の村に住み、サゴ工場を作り、サゴ生産者組合を作り、変化の中を村の人達と一緒に歩いてきました。

そんななかで、村の若者達の間で大激突が起こりました。それがこじれて動きがとれないような状態になりました。巻き込まれていた遅沢君は急に思いついて「俺が大型帆船を持って来たらどうだ」といいます。と、途端に首謀者の一人が「それだ! 海に出るならばまとまる」といい、一挙に流れが変わり

ました。このあたりの人達にとっては、海こそは修行の場であり、力だめしの場であり、働ける場なのです。

これ以降、遅沢君の帆船造りが始まりました。同氏の計画は70トンのピニンを作り、それをもってウォーレシアを巡ることです。乗組員は20名。目的は商売をすること、海民の生活を調査すること、それに体と心を鍛えることです。この20名はインドネシア人と日本人の混成です。すでに帆船は出来上がり、航海を始めています。

同君は現代の竜馬を育てたいのだ、とっています。20年前に助成をえて発芽した計画がここまで育ったことを報告いたします。

トヨタ財団の思い出

池端雪浦 国立大学法人 東京外国語大学学長

国際助成プログラム選考委員(在任1984-96年)など



私は1984年から96年にかけて、国際助成プログラムの選考委員を務めた。当時の国際助成は東南アジアの「固有文化の保存と振興」に重点を置いていて、私はフィリピン担当ということだった。しかし、選考委員いずれ劣らず、東南アジア全体に責任感を持っていて、会議はいつも白熱した議論で予定時間を大幅に超過した。80年代の東南アジアでは、開発経済や開発政治に関わる国際助成はかなり浸透していたが、文化や歴史などの研究に対する助成はまだ微々たるものだったから、トヨタ財団への期待は大きかった。それだけに、プログラム・オフィサーと選考委員は、各国の研究を着実に前進させる本格的な研究(者)を見つけ出しそれを支援していくことに、使命感と連帯感をもっていた。そして、私たちにそれは実行する若さがあった。いま振り返って、あらためてその感を強くする。財団の仕事には、熟達した広い視野に立

つ眼力とともに若さの情熱が必要なのだ。

東南アジアの「固有文化の保存と振興」というテーマのもとで、80年代には各地の地方文化・文学・歴史などへの助成が積極的に行われた。それによって、東南アジア各国の多言語・多文化社会の成り立ちと実態が掘り下げられた功績は大きい。90年代に入ると国境を横断する研究テーマへの助成が進み、さらに、東南アジア諸国間で学术交流を盛んにするための仕組と助成も図られた。財団の役割は時代とともに変化する。しかし、いつの時代にも大切なことは、財団が研究現場のすぐれた想像力を掬いあげ、それを育てていく瑞々しい感性と情熱を持ち続けることである。

企業の論理を超え、社会の必要を見て

柏木 実 日本湿地ネットワーク

日本湿地ネットワークは「日本に残されている貴重な湿地の保護・保全の運動」で1991、92年度市民活動助成を、「ヘラシギとハマシギの繁殖地、中継地における保全のための活動」で2001年度研究助成などを受ける。



私 がトヨタ財団という名をはじめて聞いたのは、1970年代後半でしたので、設立後間もないころだったようです。住む町の中で一人の難病患者の方を囲む人々のつながりの中でした。その中に、水俣総合調査の中心にいらっしゃった方がいらっしゃいました。世界最大規模の企業が、企業活動による公害の調査を支えようとしていることに驚きました。

それから約20年後、私自身が活動の助成をしていただくトヨタ財団との窓口になりました。トヨタ財団と日本湿地ネットワークの代表だった故山下弘文氏のつながりからです。とても嬉しかったことは、担当の方が、申請書の書き方だけでなく、私たちの目的や計画、個別の条件の表現法など、相談に乗っていただいたことです。

このことは、単に担当者の個人的な好意にとどまらず、トヨ

タ財団の初めからのあり方に関わっていたのだと思いあたりました。これは私が勝手に考えていることなのかもしれませんが、一先ず、企業の利益から離れて、社会の必要としている調査・事業を実施する人の立場に立ちながら、成功させるよう、資金面から支えるという姿勢の表現なのではないでしょうか。この姿勢は、社会が最も必要とすることを、最も適切な仕方を実現させることにつながります。

助成活動という共同の営みが、歩みは少しずつでも、私企業と市民社会団体とが互いの表現の違いを受け入れつつより良い社会を共に実現していく営みとなってほしいと願っています。



第5回研究コンクールで最優秀賞を受賞した函館元町倶楽部のメンバー（1988年7月）。函館の景観の特徴とも言える木造住宅のペンキの色を調査し、新しい街づくりにつなげた。

トヨタ財団と出会って

坂井正子 段々社

「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成プログラムで東南アジア、南アジア文学書の翻訳・出版に対して1982年から2002年までの間に14件の助成を受ける。



初めてトヨタ財団を訪れた日。「アジアの女性作家シリーズをやってみたいのですが……」恐るおそる切り出す私に、「それなら女性の翻訳者でやってみてはどうですか？」とすかさず提案されたのは「隣人をよく知ろう」プログラムを作った岩本一恵さんだった。私の履歴に関することなど一切質問せず、どんどん前向きに話を進め、「水準以上の本を作りたいのです」と笑顔を崩さない。華奢な身体、岩本さんの、度量の広さと志に感動した。

1983年から20年間、助成を受けて刊行した本は女性作家シリーズを中心に14点。どれも現地語からの訳出である。日本にアジア言語の翻訳者はとても少なく、その力を発揮する場もめったにない。だからこそ訳者たちは使命感をもち、本になる喜びをもって、骨身を削る翻訳作業に没頭されていたのだと思う。

原作選びから刊行まで大体3、4年。その間、契約や編集上でさまざまな問題が起こる。ひとり出版社の私は翻訳者や友人知人、関連機関に当たり、解決できない時は財団に相談した。担当は牧田氏、姫本さん、本多氏、小川さんと替わったが、組織を超えた人間的な対応はまったく変わらない。いつも助成金とプラスの協力に助けられ励まされてきた。

幸いにも14点はすべて選定図書になり、また「現代アジア



「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成プログラムで翻訳された本は600点を超える

の女性作家秀作シリーズ」が第40回日本翻訳出版文化賞を受賞することになった。財団と翻訳者と共に頂く賞である。

22年前のあの日、資金も組織もない主婦の私を、財団が助成候補者として受け入れてくれなければ、段々社は生まれてはいなかった。

平成16年度助成金贈呈式、30周年記念公開パネル・ディスカッション

2004年10月29日、平成16年度の研究助成助成金贈呈式が新宿のホテルセンチュリーハイアット東京で行われました。式には助成対象者、選考委員、財団関係者など約120人が出席し、盛大に執り行われました。

木村尚三郎理事長の挨拶に続き、個人研究、共同研究、特定課題の各分野の選考委員長から応募状況や選考審査の経過などの報告があり、その後各分野の助成対象者に木村理事長から助成金の目録が手渡されました。式後の懇親会では、全国から集まった参加者が交流を深めました。

また贈呈式に先立ってトヨタ財団設立30周年記念公開パネル・ディスカッションが行われました。このパネル・ディスカッションは「アジアをつなぐ人を育てる」をテーマに、東京大

学・姜尚中教授、市民環境研究所・石田紀郎代表理事、亜細亜大学・鯉淵真一教授、聖泉大学・高谷好一教授の4氏パネラーと京都大学東南アジア研究所・田中耕司所長の司会で進められ、アジア研究の専門家の経験談やこれからの

アジア研究についての指針などの豊富な話題が提供されました。フロアーからの質問も活発に出され、有意義な議論が展開されました。(このパネル・ディスカッションは冊子として刊行する予定です。)[事務局]



歴史に学ぶ

蟹江宣雄 トヨタ財団常務理事



1 お陰さまで30周年を迎える

本年(2004年)10月で、トヨタ財団は設立30周年を迎えます。トヨタ自動車の尊い意思によって、昭和49年(1974年)に財団は生まれました。財団の設立趣意書(昭和49年9月19日付)にも、設立に寄せる高い志が書かれています。趣意書の一部を引用させていただきますと、「このような基本姿勢に立って、このたび自動車をはじめましてから40年を機に、人間のより一層の幸せを目指し、将来の福祉社会の発展に資することを期して、財団法人トヨタ財団の設立を決意いたしました。」とのことです。財団は、「その生い立ちから、「人間の幸せ」「福祉社会の発展」という公益を意識していたわけであります。

私どもは設立当初、当時でも大規模な資産規模(100億円)の財団として発足させていただきました。現在からはとても想像も出来ないほどの高い金利水準のおかげで、年間の財政も8億円から9億円の規模を享受することが出来ました。バブル景気崩壊後の低金利下で大きなダメージを受け、金利収入が激減したときも、トヨタ自動車の厚意により、更に200億円の積み増しをいただきました。その結果、日本でも有数の資産規模

(300億円)になり、財政規模の維持を図ることが出来たのであります。暖かい配慮に心から感謝申し上げます。

事業活動としてはこの30年の間に、大きく申し上げれば、内外の研究者に対する研究助成や東南アジアの研究者に対する研究助成や日本と東南アジアを結ぶ翻訳出版助成や日本の市民活動団体に対する活動助成など、内外に高く評価されるプログラムを実施することが出来ました。助成は、総計で約6000件以上、金額は130億円を超える規模に上りました。この規模は、日本有数の大きさであります。

トヨタ財団のこうした活動を支えたのは、トヨタ自動車、経営を預かる理事・監事・評議員の方々、助成に当たったの選考委員・外部評価者の方々、助成対象者の方々、のお陰でありました。財団は、ちょうど30歳となりましたが、こうした産みの親・育ての親の恩を忘れてはいけません。今回のニュースレターの発行に際しては、記念の原稿を多くの関係者の方々にお願しました。そして、多くの励ましの原稿をお寄せいただきました。本当に、嬉しい限りであり、心からお礼申し上げます。

勿論、実務を担当した職員の方々の献身的な努力は、極め



第27回研究報告会「アラスカ発 いのちへの問いかけ 変わりゆくカリブーとエスキモーの生活」における動物写真家・星野道夫氏(1990年5月)

て大きいものがあります。よちよち歩きの財団の基盤をここまでの業容に持ってこられたのは、諸先輩の汗と涙であると思います。現役の方も、財団業務に、熱心に取り組んでいただいていると思います。

2 | 歴史に学ぶ

1. 財団の歴史に学ぶ

「歴史に学ぶ」とは、大げさな言い方になりますが、確かに時にはゆっくり昔を振り返ってみることが必要であります。ともすれば慌しい昨今ですので、私どもは財団発足の原点を、忘れがちになります。何故、財団は生まれたのか、どのような期待を負っていたのか、謙虚に思い学ぶことが必要であります。発足時には、いろいろな関係者の思いがあったはずです。出捐者、即ち、トヨタ自動車の思いは、先ほど述べたとおりのものと思います。勿論、草創期の役職員の、熱い思いや情熱も忘れることは出来ません。トヨタ自動車や役所や先輩財団のお世話になるのを、出来るだけ自力で行おうとした気持ちやエネルギーも大きいものがあると思います。

現在、財団は、30年を節目とした財団改革を真剣に考えています。財団を取り巻く環境の変化への対応や陳腐化した制度の見直しが必要になってきました。その際大事なことは「変えてはならないもの」と「変えるべきもの」を峻別することです。時代がいかに経ようと、財団発足の原点や志は変えてはならないでしょう。一方、時代や社会や環境の変化に応じて変えていくものもあるでしょう。そして、新しい財団のあり方を考えていく際には、財団の経営資源の強みと弱みを分析して、選択と集中を行っていくことも必要であります。財団には、限られた資源を有効に活かしていく必要があるからです。

そうした改革の両輪として、昨年(2003年)4月に発足したプロジェクト期間3年の編纂委員会(年史を編纂する)と、昨年10月に発足したプロジェクト期間2年の構想諮問委員会(中長期の財団のビジョンを考える)を立ち上げました。いずれの委員会も、歴史に学び未来へ発信することを、考えていただいています。

2. 財団の独立性のこと

この編纂委員会活動の中で、多くのことが分かってきました。

その内容はとても、このニュースレターで負いきれるものではありませんし、本来、財団の年史にてご紹介すべきものですので、ここでは詳しいことは省略させていただきます。

分かってきたことのひとつに、「財団の独立性」のことがあります。編纂委員会の活動の中で、よく調べていきますと、財団の設立前から、トヨタ自動車では、「財団の運営は、財団に任せよう。」との意思があったことが分かってきました。昭和40年代の後半の、大企業への批判が世間を賑わせていた時期に、トヨタ自動車の中では企業の社会的責任を意識して真剣な議論が交わされていたのであります。公益を意識した組織を作る以上、そこに任せたいほうが良い、という意味があったのであります。

初代の理事長は、財団に全てを任せ、財団の成長を見守っておられました。負託を受けた、初代の専務理事も、理事長からの信頼に十分に応えられました。こうした「阿吽の呼吸」があったことも、分かってきたのであります。要は、トヨタ自動車が聡明であったお陰で財団の独立性は認められて、そのため財団が伸び伸び意義のある活動を行って行くことが出来たと思うのであります。財団は、これらのことを基礎として、今後の活動にどうやって活かしていくかを真摯に考えてまいりたいと思います。

3 | 私の考える財団像

現在、構想諮問委員会で、財団の中長期のビジョンを鋭意検討いただいています。どこの財団も現在、運営資金の減少に悩み、また政府主導の公益法人制度改革が間違った方向に行かないよう心配をしています。その中で私は、財団というものに、明るいビジョンを持ちたいと思います。20世紀から21世紀に入った今、財団には時代に応じた新しいテーマを考える必要が出てまいります。役職員が一体となって、公益を追求していくことも大切でしょう。世間との関わりという面では、財団という組織を媒介しているいろいろな方が交流していく、財団という組織を核にして助成の情報や蓄積が交流し拡がっていく。そのような組織のあり方をこれから考えて行きたいと思えます。もっと世間の方々に理解していただくよう分かりやすく発信することも大事であります。皆様方の、暖かいご支援を心からお願い申し上げます。